

小説・ハイデルベルクのジャン・パウル (1929)

作：ヴァルター・ハーリヒ (1888-1931)

飯塚 公夫 訳

第一章 旅

1818年5月、公使館参事官（1799年、ヒルトブルクハウゼン公国のそれに任命される。）のジャン・パウル・フリードリヒ・リヒター（¹⁷⁶³⁻₁₈₂₅）は、前年同様初夏をハイデルベルクで過ごすべく、バイロイトを出発した。年齢55歳の彼であったが、60代と見られかねなかった。自身実年齢より年を取っているという感じがあった。

旅立ちの前日彼は、昼食後もう一度書斎から居間へ下りて行った。この時間帯は、そこには二人の娘だけがいて、読書をしているのだった。本をテーブルクロスを取り払ったテーブルの上の方に広げて持ち、顔は両手の中に埋まっていた見えなかった。姉のエマは父である彼の顔をしていた。丸顔で、些か上に跳ねたような小さな鼻、力強そうな唇、ふわっとした顎の持ち主だった。そうあってしかるべき若い娘顔はまだ全くそこには書き込まれてはいなかった。彼の顔といっても、奇妙なことに、若い頃のそれではなく、すでに生活も落ち着き、その顔つきも、青春時代の熱も醒めてしまったあと再び子供のようにってしまった、そんな大人になってからの顔だった。この分だと、顎の部分がもときつく前に突き出てくるだろう、この顎がふわっとした丸みを失うことはないだろう、そうジャン・パウルは思った。

オディーリエの方はむしろ母のカロリーネに似ていた。こちらの方がこの頃すでもう輪郭がよりはっきりしていて、形がより出来上がっており、反り返ったキューピットの弓といった感じが口にはあった。しがない村の牧師の息子で、母方は単純素朴な織物職人一族の孫である彼よりも血筋はよかった。彼

はこの顔は自分に似ているエマの顔ほど好きではなかった。オディーリエのこの表情が、かつて母の場合に彼を魅了していたのだ。今の彼には、すでにその中に、将来きつい性格になるだろうこと、自分本位で他人にとやかくうるさい人間になるだろうということが見て取れた。よりいい血筋！それを当時の彼は、自分の血統を高めることで求めたのだが、のちには煩わしく感じてきた。あまりに犠牲を払うことを求め、あまりに愛されることを求めるものだから、時には憎悪すらするようになった。決して告白したことのない、決して声となったことのない憎悪であったことはもちろんだ。

彼は二人の娘に、上に行ってカナリアに餌をあげて、リスのハンスの入っている鳥籠をきれいにしてくれと頼んだ。このとき疚しさを感じたのは、娘たちがにんまりとしたことで、見透かされたという感じがしたからだ。二人は飛ぶようにして階段を上がっていった。彼は、彼らがいともやるように、何か彼に尋ねるために引き返してこないか、もうしばらく待った。やっともう大丈夫だと思つと、部屋の隅にあるマホガニーの鏡一家にたったひとつの—の前に立った。もう一度落ち着いて旅立ちの前に、この決定的な旅立ちの前に、自分の顔を、自分の姿を検証するためにである。変だな、と彼は思った。これが『ヘスペルス』と『ティターン』を書いた作家であるジャン・パウルの顔だとは。あのおかしなゾフィー・パウルス(1791-1847。ハイデルベルク大学神学教授エーバーハルト・ゴットロープの娘で、この物語の直後、ほんの短期間アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル夫人となる)という娘が、まだほんの昨年マンハイムのライン橋上で接吻をしまくった顔だとは。これは小作人の顔みたいだ。ふやけた赤ら顔で、しまりもなければ魂も入っていないし、その目はチカチカしている。しかしこの顔には、子供に通じるものがある—心理学者や女性通にはおそらくそれに相応の判断を下すことが可能だったろう—母親の優しさを呼び起こし、厳しさたっぷりの捉え方をしても、結局はさつとそのやさしさをひたたくっていつてしまうようなそんな何かだ。顎の上のこの小さな窪み！だが全体的には非精神的だ。およそこの顔に何かを求めようとするには、すでに彼の本を読んでいるか、彼の口から出る話を聞いていなければならなかったのだ。

彼は頭を横に振って、女性たちがこんな顔を崇めることができたことを、何度も不思議に思った。ああゾフィーよ！ 神々しき娘よ！ 彼女は、彼がハイデルベルクに到着するときを、今や指折り数えているのだった。「いらっしゃるときは、お迎えに行けるよう、ちゃんとお手紙をくださいね！」そう彼女はまだ先週のうちに書いてよこしていた。「私には、あなたとまた、あなたさまとまた、ご一緒できるという以外にもう何も考えることはありません！」彼は自分が手紙の文面をほとんど諳んじてしまっていることに、顔が綻んでしまった。昔ながらのいつもの調子だ。こういう手紙をかつての『ヘスペルス』の至福のときには、どれほど受け取ったことか！ どんな手紙も、この20歳の娘の、老いゆく男への今現在のこの手紙ほど、幸福な気分にしてくれるものはなかった。

カロリーネはこんな体験を理解してはくれないだろう！ これですべてが青春が回帰するのだし、これがこの先の新たな10年の創作のエネルギーとなってくれるのだった。かつては星だったものが、溶けて滴り落ちて流れとなって地面に吸い込まれかかっているときなのだ。つまりところあいつらはみな、何といてもこの流れを糧として生きているのだった。これからさらにいったい何が創れるだろうか！ 『紙^た紙^こ』という作品（これが未完の長編『舞臺』へと発展する）、これで一大ユーモア世界を構築してやろうと思っていた。それは、この「神聖同盟」の時代を舞台にした話なのだが、この先いったいどんな作品が出来てくるものか、誰が知ろう。もう一度若い娘がひとり彼の心の中に入り込んでくれることなしに、それをいったいどうやって創れというのであったらどうか！ 彼は鏡から後ずさって、批判的な目で自分の全身を観察しようとした。どこか弾んだ感じが体の動きにあるのが見て取れた。これに対しては、「おしゃれじじい」ということが出来ただろう。もしそこに涙を誘うような一面がなければだ。そう、これだった。涙を誘うような一面というやつだった。それが彼の姿形全体に覆いかぶさっていた。真っ白とはいえないチョッキにも、着古した黒ビロードの襟付きの、ちょっと擦り切れた青いジャケットにも。カロリーネはちゃんと旅行用に、新しいジャケットを用意しておいてくれたのだ。しかし最初の郵便馬車駅で、彼

はこの古い方を再び身につけるつもりでいる。新しいジャケットはなしだ！そう彼は決断を下した。いやはや彼は女性通なのだ。どんな微妙な心の動きにも通じているのだ。

ただその目の中にチカチカ光るものがなければいいのだが！聖ヨハニス教会の強い黒ビールのせいだった。そして手の震え、これは桁外れのコーヒー摂取から来ていた。年上のゲーテの手は間違いなく、震えてはいなかった。どこにおいても、この鋼鉄の心臓を持ったオリンポスの神は、勝利者だった。自分より年上のもも年下のもも振じ伏せていた。ヘルダーもシラーもだ。そして彼ジャン・パウルよりも長持ちすることだろう。彼はゲーテが、わが娘、あのゾフィーの前に姿を見せる場面を想像して、この可能性の結果がどう出るか判断を下すべく、鏡に映る姿を調べてみた。小さな窪みを彼は秤に架けることができた。さらに、命がけの寄る辺なさと『ヘスペルス』と『わんぱく時代』と『美学入門』と『レヴァーナ』をそう出来た。あのヴァイマル住人の大理石のように冷たい創作物が、これに対抗しえただろうか。彼ジャン・パウルの筆は、心の中に炎を投げ込む放火用松明だった。ゲーテよ、あなたは神だ！あなたは無慈悲にして苛酷なる神だ！違う、女性の心に宿る高貴と善の極み、そしてぱっと燃え立ちうるもの、これは彼ジャン・パウルの方に向かうに違いなかった！そしてこの小さな窪みが決め手だった。

満足して引き下がると、去りがてら、少し短くなったズボンを長靴に押し込んだ。そのとき思いはすでにまた、執筆中の『自叙伝』にあった。娘羊飼いうスティエーネ（『自叙伝』遺稿中では、「アウグスタないシアウグスティーナ」といわれている女の子の本名とおくからのあい）一少年の最初の遠隔愛の対象である。かろうじてほんの数瞬前のことだった。おかしなことに今や突然もはやぼっとしている場合ではなくなった。カロリーネのこと、子供たちのこと、手の震えのこと、チカチカする目のこと。どれもみなおかしなことだった。それにしてもユスティエーネとはどんな風だったか。

彼は二階の書き物机に向かっていた。女の子たちが周りでじゃれていた。彼が頼んだことでお祭り騒ぎが生じていたのだった。邪魔にはならなかった。子供たちはいつでも闖入してきて構わなかった。その間彼は、彼らに注意を払い

ながら、複雑複合文を作りあげていった。これこそが彼らの父への信頼のみなもととなった。のちに世の人を興奮させるようなものを父が書いているのを、自ら醸し出していた決して静かではない環境の中にどっぷり浸かり込んで見ていたこと、これがである。かれらはこうして、普段自分たちが見ない彼のこの行為の中に、人間的な一面を、この世界が好きなのだという一面を感じたのだ。またしても彼は、今のこれを、ゾフィー・パウルスと関連づけざるをえなかった。なにしろ彼女は、エマと大きく年が離れているわけでは全然なかった。若者を引きつける何かがある中にはあったのだ。人間であること、全面的に人間であること、これだった。彼は若かった。老齡期の疾患をすべて通り越したうえで、それが感じられた。彼はにこやかな人だった。自己に充足している人だった。若い娘のああいっただ愛情、ああいっただ奇妙な愛情を自己納得できる幸福な人だった。

昨年の出来事が彼の目の前に浮かび上がってきた。ハイデルベルク大学教授の若きご令嬢とどのようにして知り合いになっていたかが。視線のはじめての互いの中への沈潜が、マンハイムのあの橋での抱擁に至るこの合流が。そして今このとき、数日したらこういったすべてのことが繰り返されることになっているのだ。ゾフィーはライン橋を訪れたのだ。「でもそこで私の気持を揺り動かすものが何なのか、私の拙い筆では表現できません！」ここにあるこの手紙の中にそうあった。ああ汝、神々しき手紙よ！「拙い筆」とは！シェイクスピアを原語で暗記していて、ハイドンのアダージョの調べをエスターラインのグランドピアノから魔法のように呼び出して奏で、絵筆を操れば、フランツ・クリューガー（1797-1857、動物画、とくに馬の絵を描き、「ホー」（ホー）とも呼ばれることもあった）もものかは、生命力溢れる丸々とした気性荒き馬の身体を紙面にぶつける、このすべてのミュージックから接吻をもらっている人物が！それが今、「私の拙い筆」とは！そこで何かとても強く働きかけるものがあったということ、この娘が表現できなかったとは！彼は、鳥の餌の入った袋をボールのようにして投げあって遊んでいる娘たちに微笑みかけた。ユスティーネへの初恋の物語はこれ以上は書けなかった。彼の思いは、指折り数えているハイデルベルクのゾフィーのもとにあった。

カロリーネが、旅行に持っていくものの荷造りを手伝うため、部屋に入ってきた。今回は、彼を滅入らせるつもりかと思えるような入念さで荷物を詰めていった。悩まげな神経質そうな顔つきをしていた。そんな顔つきをしようとしていた。目から口許に至るまでそんな顔つきを張り渡していた。「ご覧ください。私はあなたの世話をしているのよ。あなたの思いはあのパウルス嬢にしかないのでしょうか！」そういつているようだった。「だってあなた、私はあなたのことなら何でも承知しているわ。今だったら、これは花を愛でるような愛情なんだというかもしれないし、あのゾフィーなんて人は、一個の人間としては自分にはもうとっくにどうでもよくなっていて、ただ自分の創作世界の登場人物を体現しているに過ぎないのだというかもしれないわね。あのときはいくつもの接吻のことを私に告白したのではなかったかしら。そして、これはもっとひどい話だったけれど、あなたは、肉体的融合への憧憬に満ち溢れた時間を過ごしたんですよね！」彼は胸苦しさを感じながら、抜粋帳をあれこれと当たってこの生原稿の中から、何か見つけようとしていた。しかしこの手伝いにも彼女は乗り出して、用紙の束をいくつか掴んで取り出した。『我々の感情の常緑性について』である。前年のマンハイムへの遠出のあとに、ハイデルベルクで書かれたものだった。「これお持ちになるんですよね」と尋ねると、その用紙を高々と掲げて、そのタイトルを、一語一語はつきりと発音しながら読んでいった。『我々の一感情の一常緑性—について』と。

彼には彼女が苦しんでいるのがわかり、娘たちを部屋から出すと、この女の方へ両腕を伸ばして、「カロリーネ！」という。すると突然彼女の目に涙が滲み、彼の首に縋って、「パウル！パウル！」という。それ以上はことばにならない。ことばではいえないが、両人ともわかっているのだ。彼は、ハイデルベルクへ行ってゾフィー・パウルスに再会せざるをえないのだということは。それからなのだ。やっとならぬ話なのだ。両人にはわかっているのだ。それから万事よくなるだろうということが。

彼女は黙ったままその生原稿を荷に詰め、それにいろいろな種類の用紙と4本のペンを添えた。彼はまたしても、シュヴァルツ教会顧問

小説・ハイデルベルクのジャン・パウロ（1929）

（フリードリヒ・ハインリヒ・クリスティアン、1766-1837。ハイデルベルク大）の「友の館」の庭園で仕事をするだろうからだ。「ゾフィーが、その家の主人の部屋から彼に目を向けているうちは」と、兩人にはわかっている。また何か似たようなものをお書きになるのかしら、『我々の感情の常緑性について！』他にことばはなく、これについては彼らは口にしようとはせず、お互いの反目感情を旅立ちの準備の中に紛れ込ませる。手渡すたびに、そこに大きな意味を込めることができ、一見細かな愛情表現とみえるものにも、常にたくさんの無言の非難をこめることができる。

それが彼女の発したもののなのか、それとも家庭内の空気に圧迫されてひとりで苦しんでいたのか、彼にはわからなかった。もう一晩ベッドをともにした。泣くのが聞こえたので寝たふりをしていた。翌朝馬車がやって来た。30分したら中に腰を据えて、この家の胸苦しさを感じさせるすべてのものを後にして、広い世界へと出て行くだろう。コーヒーを飲んだあとに、細々としつこくあれこれ命令を与える。居間の壁の塗り替えを、彼の旅行中にやっておくべし。焦点をつくって家を燃やさないように、コップはもちろん陽の当たるところには置かないこと。また遠出するときはずっと、ラム酒入りの小瓶を、ひよっとしたら蛇に咬まれるかもしれないから、携帯していくこと。彼自身、ありうべきあらゆる災難を予防する気であるこういう指図がいささか滑稽だとは感じている。いつもこういうことをして家族に暴君としてふるまっているのではないか。しかしいつも待ち伏せしているような災いとこのこういった闘いは一生涯行われるのだ。最悪のことが出来たことがある人なら、親友すべてが死に絶えてしまっている人なら、こうなるものだ。そしてそれで旅立ちまでのときが快適に埋め合わされるのだ。

馬車は立派で堂々たるものだ。友人エマーヌエル（エマーヌエル・ザームエル、パイロイト在任の友人、改宗ユダヤ人商人の子息。改宗後の性はオスメント。1769-1842）が貸してくれた。大きな栗毛は郵便馬車用の馬だ。カロリーネがドアのところに立って、目に涙を浮かべている。娘たちは、彼のいる馬車に攀じ登って彼の横と前にちょこんと座る。結びの糸はもうすべて回収され、すでにひとつの真空状態が、残るものたちと去るものとの間には存在する。これからほんとうにひとりになり、旅という素晴らしい解放状態が始まれば、そのときあらためて

また思考と感覚を働かせる気である。そしてこのふたりの娘が数秒の時を長引かせようとし、最後のまなざしと接吻をもっと先延ばしにしようとする。それに彼は心を動かされ、彼らの頭を撫でてやる。カロリーネはハンカチを振る。ミュンヘンの大学にいるマクス(1821年に夭逝する息子)のことにどうしても思いが行く。今回は訪ねないつもりなのだ。

馬が動き出したとき、突如彼は奇妙な一瞬を体験する。彼はカロリーネを見つめる。その顔を見て、全く他人の顔のようなのだが、何となく既知のものに思われるそんな顔を見ているように驚く。この見事に反り返った鼻、このきりっとした作りの口、この額、その上にのっかった黒髪の頭、彼はかつてもうこういったものを見ていたのだろうか。この家、この通り、これは既知のものに思える。もっと前の生活の中で出てきていたのだろうか。彼は作家ジャン・パウルなのだろうか、それとも公使館参事官リヒターなのだろうか。その通り。彼はかつて永劫の昔、そうだった。ラテルナマギカ 幻燈の映し出す影のように、彼のそばを通り過ぎていく息づかいはあるが、彼は時というものに縛られずに空間を浮遊している。地上から遠い遠いところだ。そしてその地上に見えている姿形を持ったものが、次第にぼやけていく。彼はひとつの不安に、ひとつのとてつもない圧迫感をもった不安に完全に満たされている。それはあたかも自分があらゆるものに責任があるかのようなのであり、世界の運命がものすごい重みで彼にのしかかっているかのようなのだ。ほんの一瞬でしかありえないのに、多年の年月の間のようなのだ。いまやと車輪が回転しはじめる。そこにはカロリーネが立っていてハンカチを振っている。娘たちが彼を囲んでちょこんと座っている。しかし彼にはこのすべてが他人事のようなのだ。とてつもなく他人事のようなのだ。この人たちはもはやほとんど知らない人であり、それはあたかも、旅の偶然が引き合わせたかのようなのだが、その背後に彼が感じているものは、巨大エネルギーによって運ばれてきたものか、そこにゾフィーがいるという感じであり、ゾフィーがいてもおかしくないという感じであり、ゾフィーの世界がそこにあってもおかしくないという感じ、ゾフィーは永劫の昔からそこにいてもおかしくないという感じである。それともこれは彼女ではなく、これもま

た、もはや人間ではない、念力や磁力で彼を引き寄せる何か別の力の現れに過ぎないのだろうか。一瞬にしてこのすべては消える。彼は振り返って、カロリーネに手を振る。目に涙を浮かべてだ。そして再びハイデルベルク大学哲学学部名誉博士・公使館参事官リヒターに戻る。

娘たちが馬車を伝い降りたので、思いを旅の目的地に向けてと、そのときはじめて、ハイデルベルクには、ゾフィー以外にまだ別の重心があったことを思い出す。たしかにこの魅力的な教授令嬢と心を通わせる関係を持つてはいた。しかしそれでも、こういった魂の出会いが行われる圏域だけの暮しではなかったのだ。なんといっても偉大なるドイツの作家ジャン・パウルなのだった。自分が何か事を成し遂げなければならない立場だった。この地上の精神の足場作りに、またそこにおける神経と感覚の補強に共同責任を帯びていたのだ。歴史の中に自分の名を刻まねばならなかったのだ。こういった役割に目を向けたとき、ハイデルベルクの滞在は重要なものだった。ひょっとしたら彼の全人生のクライマクスであったかもしれなかった。ひょっとしたら節目とさえなってくれるかもしれなかった。ヴァイマルへの最初の旅にすら匹敵するものとなってくれるかもしれなかった。ただこのことはちゃんと考え尽くしかつ感じとらねばならなかった。ヴァイマルの頃は若かったので、全く当たり前のように印象や体験が柔らかな心をわしづかみにしてしまった。今はもうどんなに新しいことがあっても、がらりと変化させられるということではなかった。何かあってもそれをそのまま受け取ることはせず、思考によってちゃんとしたものに作り上げねばならなかった。

もちろん、ヴァイマルの頃に結ばれたヘルダーとの魂の兄弟関係は、いかなる事であろうとも陰りを帯びることはなかった。しかしハインリヒ・フォス（1779-1822. ハイデルベルク大学文獻学教授）との友情は全く無に等しかったといえるだろうか。手放さなかった彼からの10通の手紙が馬車の中に置かれていた。すでに人生は下り坂となり、他の人たちはみんな死んでしまっている以上、もう一度ひとりの友とともに燃え上がってもいいだろう！彼は思わないわけにはいかなかった。論争好きのヨーハン・ハインリヒ・フォス老人（1751-1834. 子息と同じくハイデルベルク大学文獻学教授）の子息である

あの若き神学教授が、彼に『ウィンザーの陽気な女房たち』の翻訳を送付してくれたことを、お互いの手紙のやりとりが、やがてお互いをますます近づけてくれ、そのあげくもう一度友人の胸に縋って泣くべくハイデルベルクへ赴かざるをえなくなったことを。ああ、こうやって他人の生活圏へ至福な気持で進入していくのだ！こうやって新たにあらゆる問いかけを展開していくのだ！際限のない報告をやらかして終りが見つからなくともだ。自分というものを新たなひとりの人の前でさらけ出し、またその人の自分というものを、全細部に至るまで吸収しつくすのだ。なぜならその報告は全部大事なことだったからだ、またそれらの向かう方向がいまやと定まったからだ。向かうは二つの世界が出会い、すべての星をお互いの中に放出するこの一瞬なのだ。

そしてこれは、ゾフィーと燃え上がってお互いの中へ入っていくような、ただそんな永遠の中での人間同士の出会いではなかった。ここでは生き生きとした行動があった。ドイツ精神がかなり前へ推し進められた。彼が、ほとんど彼ひとりがそれをいまだに尊重していたそんな18世紀の古びた人類の理想、それがここでは、力強く芽吹くロマン派の発芽力と和解していた。グレス(ヨゼフ・フォ、1776-1848)はドイツの伝説の宝庫へ手を伸ばして、今日の世代に、彼らの出自を、またどれほど彼らがおのれ自身のことを忘れていたかを示そうとした。クロイツァー(フリードリヒ、1771-1858、イデルベルク大学文献学教授)、このかつてギュンデローデ(カロリーネ・フォン、1780-1806、近年再発見されている女流詩人)の不幸な恋の相手だった男は、宗教のさまざまな顔の背後に人間すべてに通じる原宗教を探求した。これらはもちろんシュレーゲル兄弟とは別の精神のつわものだった。彼の不倶戴天の旧敵だったこちらのものは、今では、カトリックのオーストリアが、メッテルニヒの反動の味方を求めて遣わしたメッセンジャーとしてドイツを飛び回っていた。一瞬彼は、かつてヴァイマルとベルリンで出会ったこのふたりの敵対者に思いを馳せざるをえなかった。そわそわ落ち着きない肥満型のフリードリヒは、実のところ時には気に入ったときもあった。そして、がらがらに痩せ衰えたコチコチ人間アウグスト・ヴィルヘルムに対しては、芸術顧問官フライシュデルファー(『ティーターン』の登場人物)を、その鏡像として向き合わせていた。彼にとっては、魂のない冷たい美学至上主義の化身だっ

た。このふたりが彼の眼中から姿を消してしまっていたことといたら！彼らの滞在先も、書いているとしたら何なのかも、もはや全く彼の関知するところではなかった。

思いをハイデルベルクへ戻そう！あそこには活気があった。あそこからは運動が転がり出すことが可能だった。ゲレスとクロイツァーとあのヘーゲル教授。まだニュルンベルクで付属神学校校長をしていたときからの知り合いだった！ハイデルベルク、ドイツ精神の牙城！そして彼をこの男性たちはその中心に迎え入れてくれた。忘れもしないあの朝。彼らが羊皮紙製の名誉博士学位記を持って彼のもとに姿を現したあのとき。親友フォスとクロイツァーとヘーゲルがである。彼がフォスの首に抱きついたことといたら！それ以来彼らは親称でお互いを呼びあうようになった。彼はあの一瞬を追憶の形で味わい尽くした。ハイデルベルク大学の名誉博士、これはゲーテの得ていた諸々の顕彰に匹敵するものだった。ほんとうは、このオリンポスの神が到達したどんなものよりも美しく、意義深いものだったのだ。

忘れもしないあの数週間。ゾフィー抜きでもだ。ティボー一家での家庭コンサート。ここで彼ははじめて古いイタリア音楽を聴いた。そしてシェルバー家でのあの奇妙な動物磁気の会。ここでは思いがけない治癒力が自分にあるのを発見した。そしてさらに、学生たちの松明行列。食事中に突然、通りに、行進する足音がこだました。歌あり、色とりどりの学生会の幟の荒れ狂う海ありだった。彼は外へ飛び出していき、両手を差し出して叫んだ。「手はどこ、君たち手をこっちへ出して。握手できるように。その手がみなひとつの心ハートなんです。」握り締めるのはいつも一度に六つの手だ。夢のようだった。そんなことばがどうしてまた自分の中から出てきたのかは、自分では知るよしもないものの、彼が口にしたあることばとは、自分の中の作家はそうではないが、自分の中のドイツ人は、自分がこの顕彰に値すると思っております、だった。彼は今でもまだ、いみじくもこんなことをいったことを、些か誇らしく思っている。そして彼がそれから、一番近くの人たちと腕を組んで、立ち去る人たちと一緒にネッカー橋まで行進していったことといたら！雨が降っていた。ある

人が、カラフルな同郷学生会の縁なし帽を彼に被せた。学生と腕を組み、ドイツ青年のカラーを禿頭に戴いた彼。そこには至福の気分で、些か息切れしつつ、この群集とともに行進する自分があった。声をふりしぼって歌いながらだ。帽子はきっちりとは合わなかった。繰り返し一方の耳に押しつけねばならなかった。短すぎるズボンは長靴からちょろりとはみ出た。教会顧問シュヴァルツは何度も押し込んでくれた。こういう行進の中にあっては、些か笑える存在だったのだろうか。よもやこういう挙措態度が、ゲーテのあのいかにもご立派なこわばりぶりを取り違えられることはなかつただろう。まさかである。興奮状態の中へ巻き込んでもらいたかつたのであり、溢れんばかりの心を溢れさせてもらいたかつたのだ。もしかしてゲーテには、ズボンがはみ出してしまふなんてことはなかつたのだろうか、ニコニコ笑いながらそう思ったものだった。

しかし白眉はやはりヒルシュホルンへの遠出だった。半天蓋の船は、帯状に連なるカラフルな三角旗にまで花冠が施されている。もっと小さな伴走船からは、楽士たちが、人々の集う方へ向かって吹奏の楽を奏でる。おそらく80人くらいだろう。教授たち、学生たち、いと美しきお嬢様方・ご婦人方、スウェーデン皇太子すら、彼に敬意を表して集っているゲストの中にいる。そうやって城や山を目の前に見ながら移動していく。ネッカーシュタイン城跡から旗がなびき、ハンカチの挨拶が送られる。全小船隊が親船の周りに集合する。学生たちと市民たちだ。乗り物すべてから、音楽がこちらに鳴り響いてくる。お次はヒルシュホルンの野天でのパーティだ。続いて野原でのゲーム。常に彼が中心で、お嬢様方とご婦人方とに囲まれ、接吻があらゆる方向に分け与えられる。それはあたかも彼の小説が生を得て、彼を引き込むかのような。美と、おいしい心のご馳走に耽溺し、まなごしを飲み干す。そしてその間ずっと、ゾフィー・パウルスとのはじめての相互理解がある。

再び思いはゾフィーに行き着いた。ここから先へは進まない。このいとしい名前が、車軸のガクンガクンというリズムの中に消えていく。もう一度辺り一帯の風景を一瞥する。何度も何度も彼が描いてきたフィヒテル^{ゲヒルゲ}山地の風景だ。彼はそれをじっくり見ておかなければならないと感じる。尾根の方へすつくと

伸びる^{フィヒテ}唐檜の森たち。道路脇の斜面を一本の楡の木が覆っている。ひとつの村が谷に、柿葺の屋根を見せて横たわっている。馬は単調にパカパカと早駆けする。老人の顎が胸の方へ沈んでいく。御者は、公使館参事官殿が今頃やっと軒をかきはじめているのに驚く。

第二章 シュレーゲル

道中においては、最終目的地のことしか考えないのはよくないことだ。そこに着いたら、またぞろ最後の目的地として家庭^{うち}が恋しくなるだろう。いっそ、ジャン・パウルがバンベルクの直前で目を覚ましてからというもの、ひっきりなしに家庭^{うち}を恋しがっていたといってしまった方がいいのだろうか。もちろん彼自身はまだそうとはわかっていず、自分の思いのたけは、ハイデルベルクへまっしぐらだと思っていた。とはいえやはり、人の心によく通じた彼のことなのだから、間近に迫ったネッカー河畔都市での滞在のイメージが、はっきりとした形のものとは一向に全くなってこないことに、ほんとうは気づいているべきだったのだ。自分が泊まる部屋も想像できなかつたし—今回は「カールスベルク」で投宿するつもりだった—ハインリヒ・フォスとの再会もそうだったし、ゾフィーとの来るべき出会いすらそうだった。ところが、家庭^{うち}に帰り着いて、郵便馬車から降りるさまとか、カロリーネが階段を下りてきてお帰りなさいと彼を迎えるさまとか、バイロイトの町の自分の家ではいかに心地よく暮らしていたかということとかは、もっとありありと思ひ浮かぶのだった。ハイデルベルクへの自分の期待にはっきりとした色彩と輪郭を付与しようとする、その間常に、家族のもの^{かん}の姿が割って入ってくるのだった。そしてこれはいっておかなければならないことだが、彼はそのことによって、居心地よく囲いをめぐらされた感じがしていたのだった。見とれるような宇宙ショーから、家庭の温もりと家族との心地よい肌の触れ合いへと連れ戻されていたのだ。彼はひよっとしたら、その心の血潮をありったけ滾らせてゾフィー・パウリスを愛していたわけではなかつたのかもしれないと、ここで作者のことを言いつる

つもりは一切ない。ただ、彼がすでにバンベルクで、よそのベッドと、寝る恰好も決まっている慣れきったベッドとの違いを感じていたということを確認しておきたいだけだ。

こんな風に、バンベルク以来、すべての糸が何か秘密の糸巻きによってぐいと引かれて、突如逆方向に走りはじめたのだ。まだ魔法の力によってハイデルベルクに引き寄せられている感じはあった。フランクフルトで、3時間馬車一親愛なる友エマーヌエルの馬車！一に座って車裂きの刑にでもあったようにへとへとになって、部屋の寝椅子に腰を据えて手足を伸ばしたとき、ゾフィーに宛てて最初に ^{したため}認めることができたことといえば、わが春の喜びへは、今やせいぜい6マイルのワンステップでしかありません、というものだった。ちなみに、6マイルのこのワンステップをいつ行うつもりなのかは、まだ口外する必要はなかった。気持と疲れは、フランクフルトで小休止を挟み込むことをよしとした。いわば運命に尋ねてみようと思ったのだ。自分にとっては、どんな町でもハイデルベルクのような町に、そしておのれの魂の安息所^{ケーブラー}になってくれるのではないのかと。もしどんな町でもよければ、フランクフルトで功を奏するに違いなかった。彼は、高潔の士ダールベルク（カール・テオドール・フォ シ。帝国男爵。1744-1817）が設立した学者協会の公式通信会員の一人ではなかったか。事実この学者連盟は彼のためにバンケットを用意してくれている。こういうところなら、バンベルク以来彼を捕えていた現実逃避は過去のものとして、今現在の中で心地よく自分の居場所を定めていたことだろうが、それは不運にも船旅というおまけがついていなければの話だった。同じように音楽あり、翻る三角旗あり、マイン河畔から振られるハンカチあり、野天での宴会やダンスありというわけだ。すべてあのネッカー河畔ヒルシュホルンの比類なき光景を、あらためて目の前に思い浮かばせるものだ。違いがどこにあるのか、いうべくもなかったことだろう。いかにも、違いは、いかなる違いも存在しなかったということにあったのだ。まさに繰り返しが、一度限りの比類なき祝祭気分の発生を許さなかったということにあったのだ。

もしこのマインの旅で突然ハインリヒ・フォスに出会っていたら、すべてが

突如お祭気分となつて一オクターヴ高く鳴り響いてくるということが、容易にありえたであろう。しかし船上で別の男性の姿がグループから離れて彼の方に近づいてきたそのとき、結果は全く違ったものとなつたのだつた。目をやって、目を凝らして、両腕を広げて、次の瞬間には、両手で、驚きとともに人物を特定できたこの男性の背中をぼんぼんと叩きながら、胸に抱きかかえられていた。コーブルクの旧友ヴァンゲンハイム(カール・アウグスト・フォン。1773-1850)のそれにである。しかしお互い離れて、「どう？」ということばが行きかつたときには、高揚した気分はなしだつた。ヴァンゲンハイムがヴェルテンベルク代表としてフランクフルト連邦議会に来ていることを語ると、ジャン・パウルは老齡の嘆きを持ち出す。生きていくつて、どういふことなんだろう。ビール一本飲んだあとは決まって首筋の痛みとの闘いになるし、神経が参つたときには、楽しくもないビール抜きコーヒー抜きの数時間でバランスをとらなければならない、というわけだ。周りのお祭り騒ぎが、こういうことが話題に選ばれたせいで数瞬滞つたあいだ、二人の紳士、つまり祝われるべき作家と、些か無理に背筋を伸ばしている感のある外交官は、相並んで立っていたが、その間に、ジャン・パウルの方は、オークと樅の絡まる枝の上方で色とりどりの三角旗のたてるぱたぱたという音の中、こういう疲れる頭彰は悪魔の仕業みたいだと明言していた。そして旅の間中このままだつた。お祝いの中心人物のかわりに、話に余念のない二人の老紳士の姿があり、ぎっくり腰や視力の衰えが話のテーマとなつていつたのだつた。

こういう気分の中で、くだん件のあの6マイルのワンステップが行われてよかつただろうか。むしろ選んだのは、翌日午後にヴァンゲンハイムが差し向けてくれた馬車に乗つて、彼のホテルへやつてもらふということだつた。ここは静かで、それはもうほとんど、ガタがきている一人の老人へのいたわりのように思えた。二人のボーイが正面玄関の左右で辞儀をした。灼熱の太陽の下から、ひんやりとした大理石の階段ホールへ足を踏み入れ、レッドカーペットを踏みしめていき、金縁の鏡に自分が威厳のある足どりで行くのが次々と映るのを見ていつた。木綿の雨傘を小脇に抱え、青い裾をふくらはぎで上下させながらだ。

いともゆっくりと階段を上っていった。文字通り、厳かな静けさと気持のいい薄明かりにどっぷり浸かりながらである。二階に上り、空き部屋をいくつか通り抜けていくと、ついに書斎から男爵が出てきて彼を迎えてくれた。「ようこそ、ようこそ、ご老体!」と。

彼らは机が置かれている部屋の隅の方に座っていた。ランダーザッカーのホープルク醸造所の11年産ワインが、琥珀色の輝きを発して、そのきつい花のような匂いは、訪問客のパイプの臭いに負けまいとしていた。二本の蠟燭の炎が厳かに垂直に立ち昇っていて、窓の向こうに、広々とした広場を貧しげな人々が足早に行くのが小さく見えた。ここの洗練ぶりは見事だった。外交官は葉巻なしで済まそうと頑張っていたが、客のパイプに急かれるように、やはり箱の中から一本取り出し、蠟燭で点火してしまった。それではじめてすっきりして、本来の会話が始まったのだ。かくして見事に水をたっぷり受けて、水車はざわざわと音立てて動くことができるようになったのである。昨日のテーマ、年を取ったこと、いろいろつらいことがあること、パーティの厄介さといったようなこと、これがどこまでも尽きることなく変奏されていく。一方で、その先にまだ、満々と湛えられた材料の一大貯水池がいくつも控えていた。しかしこれは、慌ててその栓を抜いて放出する必要はまだ全くないものだった。公国の財政と同時におのれの財政もつかさどろうとしたコーブルクの元大臣クレッチェマンとの、胃が痛くなるような例の政治的揉め事のことだ。談判あり、訴訟あり、陰謀ありで、『ティターン』に取り入れるにはまだきっちり間に合ったのだ。ヴァンゲンハイムは大公によって国を追われるが、結局調査の結果ついにあの寵臣は失脚し、ヴァンゲンハイムの正しさが証明されたのだ。

こういうことのすべてについては数日ぶっ通しで話すことができたことだろう。そこには、いと高きあたりの決定を待つという事態があったし、ああだろうかこうだろうかと考えたり、ああだこうだといひあったりした時があった。そしてこのような時間は、兩人にとっては忘れがたいものとなっており、それが過去の話となった今となつては、この時間を十分味わい尽くすというこ

とは、切り抜けることができた危難の味を噛みしめる機会を与えてくれるものだったのだ。しかし彼らはそういったことについては、まだ全然語り合う必要はなかった。どちらかがそっと示唆し、暗黙の了解が感じられ、共通に心に流れているものがお互いの間で三倍強く感じとれれば、それで十分だった。彼らは、多年の年月ののちも、若き日の友のまま、肩を並べて座っていた。フランケンワインがその体内に心地よい温かさを広げていき、会話はかつての訴訟の核心を外れたところをめぐる行われたが、彼らが詩人であり老外交官であった以上、この気分において話の行き着くところが女性のことになるのは必然だった。彼らが共通のものとして互いに取り替え可能であった黄金の青春時代の思い出が橋渡しとなってくれた。「ねえ、覚えてる？」という内々のことばもまず欠くことはなかった。そして結局は今現在の真っ只中に戻っていて、話題はどんどんとゾフィーという名の周辺に近づいてくるのだった。すでに数回、その名を口にすることがほとんど避けられないという事態に立ち至ってはいたのだが、今ついに、その名が唇の向こうに飛び出してしまった。ゾフィー・パウルスの名が！

このとき伝えねばならなかったことというのは、驚くなかれ、こんな類のことだった。「彼女はバイブルと私のものしかもう読んではいないのですよー彼女は私の中で生きていますー彼女は私を愛しています！」彼はマンハイムのあの橋のことを語った。月を背にして彼が彼女を抱いてぐっと引き寄せたあの橋のことだ。彼が腕に抱きかかえていたのは、一個の肉体ではなかった。彼の透明となった感覚においてはそれは天国そのものであり、永遠なるものであり、きわめて美しく境界を囲まれたものの中であって、^{かぎり}境界というものが無い存在であった。今や再びパイロイトを旅立つときと同じような状態となっていた。「ああ、ゾフィー！」彼は部屋を歩き回り、ものすごくもくもくしたものを空中に発散し、両腕を振り回した。その間作家のおしゃべりは続いていたが、それは、もくもくしたものの^{アイドル}中で、偶像の前に跪き、この捉えがたいものの方へ両腕を広げて差し出すような内容のものだった。ヴァンゲンハイムは、^{ポエジー}老いらくの恋の詩情を認めることにはやぶさかではなかったので、何度

も「素晴^{シュベ}らしい！」と合の手を入れ、情熱に火が点いたようにグラスを蠟燭の光にかざして、わが友の恋に乾杯をするかのようにそれを飲んだ。「どんな数週間が」、作家は情熱的に語った、「どんな数週間が私を待ち受けていると思うかい！これは大変なものになるぞ！ライラックの至福な香りに満ち、心のマイエンタール（『^{へスベルス}に出でくる地名』）になるだろう！」彼が自分のおしゃべりをさらにエスカレートさせようとしたそのとき、足音をさせず一人のボーイが入ってきて、素早く、それが当家の親密な友人でもあるかのように、「勲爵士フォン・シュレーゲル様です」と来客を告げると、重たげなカーテンを脇に寄せて、一人の年配の紳士がひよひよいと通り過ぎるのを待った。

「アウグスト・ヴィルヘルム、君はなんてデブになってしまったんだ！」とジャン・パウルはつぶやいたが、それはまだ全然聞こえはしなかった。つまりこれは旧敵、あの芸術顧問官フライシュデルファーなのだった。デブ・デブ・デブ！第一印象はこれだった。騎士は全身これグレーの服に身を包んでいて、白いレースの胸飾^{ジャボ}りとカラーだけが、薄明かりの中に光を発していた。雅趣あるサーベルが尻の丸みに対して接線のようにになっていた。髪は白かった。あるいは髪粉を振っていたのかもしれない。白いカラーの上には、弁髪と思しきものの尻尾の先が、優雅に垂れていた。ウィーン会議以来、王政復古の擁護者たちのもとで再び流行となっていたしろものである。顎の両側には、ふっくらと盛り上がる形で、頬の脂肪が垂れ下がっていた。それでもこの羽根を広げたような入れものの中には、骨と皮だけの男が持つ核のようなものが隠されていて、それは結局、パワフルな額と輝く目の中に突出していた。ふわふわした覆いの中のこの固い核のおかげで、ジャン・パウルは何の疑いも抱かなかったのだ。これはアウグスト・ヴィルヘルムの方であって、フリードリヒ・シュレーゲルとは関係がないのだと。

つまりこれは勲爵士フォン・シュレーゲルなのだった。奇妙な出会いだった。作家がこの兄弟のことを敵として思い出していたのは、まだ一昨日のことではなかったか。しかしこの人物においては、何か名状しがたいものが、どんな形であれ、悪意を抱くということ禁じていたのだった。この騎士の中に

は、「人の心を打つ要素^{モメント}」もあって、ジャン・パウルは、何度かちらりと視線を投げかけるうちに、この老境に行く男の心の奥底の満たされない思いがわかってきた。なにせ彼は、自分の精神の世界をこの地上のお歴々に知ってもらおうとするのだが、この人たちは、彼の理想から、ただ党派的スローガンだけいただいて、あとは知らん顔で無視を決め込んでいたのだから。

シュレーゲルはジャン・パウルがすぐにわかっていた。いたるところからニュースが押し寄せてくるこの「フランクフルト連邦議会公使館参事官並み公使館書記官」は、この作家のフランクフルト滞在のことを知っていたのだった。ジャン・パウルに敬意を表してのバンケットと水上の旅を、急ぎの公務ゆえに失礼したことを詫びた。否応なしに好意を感じさせられてしまうようなところが彼の話し方にはあって、それはかつてのフリードリヒ・シュレーゲルにもあったものだ。例えば、彼がヴァイマルにおいて、ジャン・パウルの部屋で丸一日過ごして、自分が『ヘスペルス』への悪意ある批判を行ったことの償いをしようとしたときがそうだった。ジャン・パウルは、これはヴィーンの貴族女性たちの影響を受けてのことだろうと即座に見てとると、自分の方も自分なりの「宮廷調^{トーン}」を披露に及んだ。お偉方たちには彼はそうやって話と物腰を合わせているつもりだったのだが—これは彼らに失礼にならないようにと思つてのことであつて、自尊心の欠如からではない！—あにはからんや、それは彼のいとも人間的な人のよさに、道化のどたばた調を上塗りしていたにすぎなかったのだ。されば、この同席の場に何かこわばった感じがひよいと入り込んできていたとしたら、それはもっぱらシュレーゲルを通してのことだったろう。ただしそれは、ボーイが新たな一瓶と詰め物料理^{パステータ}を運んで来なかった場合の話だ。ジャン・パウルがまずナイフとフォークで作業を行つて、それから半分に千切れた詰め物料理^{パステータ}を、案の定素手で口の中に押し込んで、細切れになつたところを、ワインで喉の奥に流し込んだとき、寛ぎが即座に再醸成された。否応なしの人生肯定の姿勢が食事中の作家からは滲み出していた。一人の少女との会話から天国にいるような幸せを吸収できたように、このときの彼は、そこに供されているものを天上からのマナにしていたのであり、精神的享受と肉

体的享受の境界を飛び越えつつあったのだ。こうして彼らはこのとき三人で同じ一角に腰を据えていたわけだが、二人は、発言と文章で10年間激しく反目しあっていた敵同士だったが、ここで築かれた絆の三人目の男が外交官であったとはいえ、その必要は全くなかっただろう。シュレーゲルはもうとっくの昔に、何がしかの現存する権力には、ただ単に作家の名が挙げられたにすぎなくとも、それに敵対的態度をとるという習慣は廃していたのだ。ところがジャン・パウルの方はこれまでのひとときのおかげで、魂と両腕をあまりにも広く開きすぎてしまっていたため、許しと愛の心をもって、シュレーゲルはいうまでもなく、世界をその胸にぎゅっと抱きしめる気にならないわけにはいなくなっていたのだ。

それでももちろん、こよなく心地よくこよなく心伸びやかな状態にあっても、意地悪の矢を二、三本、メッテルニヒの安否やウィーンの新たな聖人クレメンス・ホーフバウアー(1751-1820、1909年にピウス十世によって列聖され、1914年ウィーン市の守護聖人とされる)のことを尋ねる形で弦からはじき飛ばさざるをえず、ウィーンでは反啓蒙主義者オプスクリラントという呼び方が、ある種の政治的宗教グループに対して使われているかどうか、でなければそちらではそれはどういいう風にいわれているのかなどと尋ねたものだった。しかし、シュレーゲルによって、懇切丁寧・具体的に教示されたり、また暗黒の中世を話しに持ち出すと、あの神のごとき崇敬を受けているヘルダーが—この名を聞くとジャン・パウルはいつも涙が目に溢れてくるのだ—まっさきに、そして彼らロマン派よりもずっと前にドイツ中世の文化的偉大さを、さながら失われた楽園のごとく、おおよそ示唆していたのだ—ということをシュレーゲルに示唆されたりで、武装は解除されてしまった。自由というものは、バンドラの箱から出てきたすべての禍の中で最大にして最も処置なしのものとして、現代に出現したというのだ。今日の人々が—彼は常に明朗にして人当りの良い調子で語った—共同体のすべての掟とモラルを思慮なく踏みこみじっているというだけの話ではない—なにしろジャン・パウル自身、その力作『ティターーン』において、これはほんとうは『アンチ・ティターーン』なのだが、そこで、こういった弊害をしかるべく糾弾しているのだ—この自由とともに、幸福とい

うものもまた地上からかき消えてしまった、それは同じく『ティターン』において、きりきりと迫ってくるような詩的迫力を持ってつぶさに描かれていたものだった、というわけだ。

突然、愛の話になった。ここではすべての有機的秩序が解体しています、とシュレーゲルは駄弁を弄した。もちろん、若い人たちが愛しい、やがて生命の樹からこの愛の果実を受胎・懐胎し、賢明にもその経過を公けにすることなく幸福感と安心感に浸るということはあつてしかるべきことだ。ところが今日では誰もが、一生のうち何度も何度も盛りの花を手折りながら果実からは逃げようとする。幸福を追い求めつつも、それは自然に反している以上、ありもしないものをそうしているのであり、自分自身を落ち着きも平和も実りもない状態に持ち込んでいるのだ。外部から堅固な掟が、おのれの幸福に反する形で荒れ狂うこの脆弱なる人間の本性に対してあてがわれ、いと高き権威筋によって支えられねばならない。世界に張り巡らされたカトリック教会のみが、退廃した時代精神に対する最後の防壁なのだ。こうのたもうたのだった。

「神ではあつても、教会ではありませんぞ」と、ジャン・パウルは反駁した。しかしシュレーゲルの仮借なさは続いた。教会共同体が支えてやらなければ、神を前にしたとき、弱き人間はどこに身の置き場があるでしょうか。自分ひとりでは負けてしまうような誘惑が、繰り返し何度もふりかかってくるのではありませんか、と。

シュレーゲルが部屋に入ってくる直前にまだ語られていたすべてのことばが、まだ空中に漂っていた。ライラックの至福の香り、心のマイエンタール！といったものだ。ここでゾフィーのことが決断を迫られてしまったのだ。いやほんとうは、もうすでに決断の段ではなかった。もしこのときジャン・パウルが問いかけに答えれば、一年前から彼の生活にエネルギーと意味内容を授けてくれていた女神は、支柱からグラグラと音立てて倒れ落ちてくるのである。彼はこの一瞬、シュレーゲルがカロリーネに差し遣わされてきたかのように思えた。「自分ひとりでは負けてしまうような誘惑」ということばが、彼の心に厳しくのしかかってきたが、それ以上だったのは、物事の自然の秩序に反して花

を手折り、実を育もうとしないという非難だった。彼は黙っていた。外交官も一言も発しなかった。たぶん、罪を犯したがる人間のことを、社交家的明るさで猥雑に笑い飛ばすことは、ここでは御法度となっているのだと感じていたからだろう。

女性的感情移入力を持つシュレーゲルは、自分の旧敵がどんな状態にいるのか、ただちに気づいた。彼は話を続けるべく口を開きながら、今しも口にすべきことばは、敵の心臓を射抜くような具合に作り上げた方がいいものか、それともいたわりの気持をもって新しい軌道に切り換えてあげた方がいいものか、自分自身と闘い、結局見知らぬ地方へ逸れていった。それはひよっとしたら、彼がジャン・パウル^{モメント}の態度の中に、丁度ジャン・パウルがその前に彼においてそうであったように、「人の心を打つ要素」のあることを認めざるをえなかったからかもしれない。彼はこの作家の内心の葛藤を見抜いていた。この作家が道徳の説教師たりうるには、繰り返し沸騰する自分の心を、全神経を集中して感じられる力を備えているに違いなかったのだ。自ら炎上しながら、時代の炎上には抵抗するという、いとも痛々しい運命なのだ。彼は、この内心の抵抗に敬意のようなものを感じて、会話を教会共同体の話から国家共同体の話へ方向転換した。おそらく彼は、彼ら三人全員をそうやって、たとえこちらの方がより熱した議論となるとはいえ、個人に関わる度合いはこちらの方がより少なくなるそんな意見の対立へと助け導いてやっているのだと感じていたのだろう。しかし三人が三人とも、シュレーゲルが穏やかに話を中断したとき、突如、自分たちは年を取ってしまったと感じたのだった。意見の対立をとことんまで追究することなど、もはやすでにどうでもよくなっているくらい年を取ってしまったと。そして由々しきことに、彼ら三人が三人とも、平和的な、諦念の魅力というものを、わが身に感じていたのだった。

こういう風な話のやりとりを彼らはまだしばししていたが、いずれもほんとうに他者を顧慮するということはしていなかった。いかなる会話も、一生こうと決めて進んでいる方向をほんの少したりとも転じさせることなどできはしないということが、たぶんわかっていたのだろう。シュレーゲルは首にぶら下げ

たカトリック最高勲章の綬を弄んでいた。ジャン・パウルは、自作『ドイツのための黎明』から引用を行い、ヴァンゲンハイムは、自ら受けているアンチ・プロイセンの御用命の中からあれこれ話題を探した。彼らは、魅惑するようない方、説得力のある証明を見つけ出していくのだったが、ただそれは、自分以外のものを魅惑したり説得したりすることはできないものだった。そしてひょっとしたら、決してそれ以上を望んではいなかったのかもしれない。新たに食卓に運ばれた暖かな詰め物料理パステータに挑んでいったとき—ジャン・パウルは取り繕いようのないがつつき振りで、シュレーゲルは、皮肉をこめた上品さでだったが、これは効果倍以上のやり過ぎものだった—彼らは、^{わらべ}童のように笑った。彼らのうち誰一人として、このような心洗われる午後を過ごしたことは久しくなかった。陽気に会話をしながら、作家は、シュレーゲルの右に並んで柔らかな敷物の上を歩いて階段を下りて行った。彼は何をかちえていたか。彼はそれをはっきりと感じていた。ハイデルベルク滞在を前にしての心の平静さである。この滞在を一ここに及んで白状できることだったが—彼は恐れていたのだった。しかし旧敵との出会いすらもはや恐怖をもたらさないのであれば、安心して運命を直視しても構わないのだった。たとえ運命が何をもちたらそうとも、老いというものが、庇護の手をかざしてくれていたのだ。

こんな気分の中で、例の6マイルのワンジャンプが実行できたのだった。まだ晩のうちにジャン・パウルは、ハイデルベルクへ向けての書きかけていた手紙を書いた。もっともそれはゾフィー宛てではなく、男の友人宛てだった。明後日出発するつもりだったが、心のマイエンタール及びライラックの至福の香りのもとへ運ばれていくかどうかは成り行きに任せておいた。ともあれゾフィーではなく、あの誠実の人ハインリヒ・フォスが彼を出迎えてくれるだろうと思うと心安らぐ感じがした。

そして彼はやってきた。町まであと2時間というところで、彼らは抱き合った。「パウルさん！」—「ハインリヒさん！」と。肩を並べ北から愛すべき町へ乗り入れたのだったが、その舗道を走る車輪が立てるガラガラという音は、すでもう耳に懐かしく聞こえていた。そして可愛げな川のその白いあぶくを

見たときには、目は涙で一杯になった。今や城跡正面の下を通り過ぎて橋を渡った。カラフルな縁なし帽を禿げ頭に被って、夜^よ学生たちと行進したあの橋だ。こちらのこの通りにはゾフィーが住んでいて、あちらのあの道は、シュヴァルツ教会顧問の「友の館」へ通じているのだった。昨年彼が滞在したところであり、庭園で再び仕事をさせてもらうであろうところだ。『我々の感情の常緑性について!』という心の声が聞こえていた。いよいよより大きな舗石の車寄せが近づいてきた。車はガタガタドスンといった具合で進んでいき、のろくなり、「カールスベルク」のホテル前でガクンとなって止まった。宿のボーイが二人の男とともに荷物を下ろすべくやってきた。下車とあいなつた。

この瞬間、中から骨と皮ばかりのコチコチ人間が一人出てきた。ダンディな身なりで、勲章の下がった緋色の鎖を首に掛け、鋭い鉤鼻が空中高く聳えていた。彼は脇に寄って、この紳士方と荷物を通してやろうとした。ジャン・パウルは、この老人とはすでに会ったことがあるが、どこでだったろうと自問した。友人フォスがうやうやしく側に近づいていき、帽子をさっと頭から取るのが見えた。それに対してもう一方は、それ相応の礼を返した。しかしここで彼は、ジャン・パウルの方に近づいてきた。ジャン・パウルだとわかったのだ。「リヒター公使館参事官ですか」と、彼はキーキー声で尋ねた。この声が誰なのか、この一瞬でジャン・パウルはわかった。「アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルでございます。ハイデルベルクで今年あなたさまとご一緒できるとは名誉なことでございます。」ジャン・パウルは飛びしぎった。「はあ、では一体フランクフルトでのあの方はどなただったのでしょうか」と、彼は吃驚して尋ねた。

「フランクフルトのですか？ あなたは弟のフリードリヒと会っておられたのですよ。丁度手紙を受け取ったところです。」ジャン・パウルは手で額を打った。自分は盲目だったのか！と。親切な忠告をしてくれるあの憂鬱人間は人違いだったのだ。ここにひょろりと痩せて立っているのが、ゲーテのカリカチュアであり、彼の敵であるアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルだったのだ。あの「芸術顧問官フライシュデルファー」だったのだ。彼はピーピー声

小説・ハイデルベルクのジャン・パウル (1929)

でいった。「どうかおいでください。あなたを今日のうちにパウルスさんのところへ連れていかなくてはならないのです。ゾフィー嬢に、このことを心にかけてくれるように切に頼まれたのでございます。」

(第二章 終)

使用テキスト Walthar Harich: Jean Paul in Heidelberg, 1929 Berlin/Itzehoe。

枚数制限により、全 67 頁（ただしアルフレート・クビーンによるイラストのページが 11 頁ありますので、本文頁数はその分少なくなります）を 3 回に分けて訳出します。今回はそのうち、7-27 頁を訳出しました。また作者ハーリヒについては、その一族を含めて、訳出後改めて寄稿する予定です。また、枚数制限のため、注は最小限度の割注にとどめました。